
異世界喫茶物語

時雨 茉莉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界喫茶物語

【Zコード】

Z9796L

【作者名】

時雨 茉莉音

【あらすじ】

迷宮都市、そう呼ばれる都市に突然来る事となつた主人公。

チートな存在な喫茶店の店主に助けられて喫茶店の店長代理として今日も彼は一日を過ごす。

家事全般チート主人公と戦闘関係チートな店主、時折やつてくる迷惑な客に苦笑を浮かべて迷惑そうにそれでいて楽しそうに毎日を過ごすのんびりファンタジーな物語。

第1話 噙茶 蒼翠（ソーナン）開店つまむ。（前書き）

初めての投稿です。

勉強不足な所も多々あります。指摘等、何でもおこがめしたら手柔らかに
お願いいたします。

ほぼ思いつきなのでプロジェクトは全く組めず、感想についてまことに書いて
ます。

その為に途中で更新も滞ると思われますので申し訳ありませんが過
度な期待はしないでください。

第1話 噫茶 蒼翠（sousouji）開店します。

異世界喫茶物語

迷宮都市。

ここは神代の時代に建てられたといつ謎の多い迷宮を探索するため
に作られた都市である。

その迷宮の中には神代の武具、文献、宝物等、歴史的に大変貴重な
ものが埋まつており、それを守るかの様に迷宮内ではモンスターが
蔓延つてゐる。

それらを退治しながら迷宮に潜り、探索をする者たちがいた。

人は彼らを冒険者と呼び、彼らの活躍に憧れ、それと同時に圧倒的
な力を持つ彼らを恐れた。

ここはそんな世界で、僕は今日も店の扉の札を切り替える。

喫茶・蒼翠 - sousouji - 開店します。

僕がこの都市に来たのはほんの5年前のことだ。

カラランとドアベルがなり、今日一番田の客に僕は磨いていたグラスを脇に置ぐ。

やつて来たのはここの一常連で少し頭の弱い冒険者である、ちなみに美人。

「いらっしゃいませ…と、キュリエルさんじやないですか…久しうりですね。」

「やつほー、元気にしてた〜? ゆーくんは相変わらず硬いわね〜。」

天真爛漫、そんな言葉が似合いそうな彼女に苦笑しつつ、目の前のカウンター席を陣取つてニコニコと笑つている彼女にアイスティーを淹れる。

ありがと。と礼を言う彼女に笑みで返し、最近起こった事や世界情勢など、世間話をしつつ彼女の頭に付いているピコピコと動く猫耳を眺めていた。

元の世界でトラックに撥ねられて気が付けばこの世界の迷宮の32階層目に寝転がっていた。

偶然通りかかった冒険者であり自分の命の恩人である銀子さんに捨ててもらわなければ今頃はモンスターの栄養となっていたことだろう。

銀子さんの話では食べられる寸前だつたとか。

僕がなぜこんな場所にいるか聞かれたときは困った。

正直に話してもらえる内容でもないし、迷宮から出て外の風景を見てなんとなく「ああ…もう帰れないんだな」と不思議と納得してしまった自分にも愕然とした。

ならばと銀子さんは僕にいろいろな事を教えてくれた。

この世界で生きしていく以上の最低限の常識と知識、自衛の為の護身術まで教えてくれたことには感謝はしている、厳しかつたけど。

この店喫茶・蒼翠も銀子さんの所有する店である。

彼女に少しでも恩を返すために僕はこの店でマスターとして働いているのだ。

「あ、もうこんな時間だ。」

キュリエルさんは店の掛け時計をけりうつと一瞥して慌てた様に立ち上がる。

時刻は昼前を指していて彼女の所属するパーティの行動を考えるとこれから迷宮に潜るのだろう。

「「ひつとうさま。それじゃあまた来るね？」

バイバイと手を振りながら駆けていったキュリエルさんを見送り、僕は彼女が飲んでいたグラスを下げる。

今日も平和に過ごせますよしこと益も無い事を考えながら。

しかしそれは叶う事無く、来客を告げるドアベルが鳴ると銀髪を腰まで伸ばした紅眼の女性が現れた。

「あ～…疲れたあ…」

ドカツ、とカウンターに大きく膨らんだ麻袋を放り投げると女性はカウンターの中にあるグラスを勝手に持ち、棚に置いてあるワインを適当に見繕うと手酌でグラスを煽つてしまつ。

見てくれば世の男性の殆どが振り向くであろう美貌に出るトコは出て引つ込むトコは引つ込んでいる彼女、勝手に店の、しかも昼間から酒を飲んでいるその姿からは想像も出来ないが街のギルドの上位ランク持ちであるらしく、しかもこの店の本当の店長である。マスター

普段はこんな事はせずに真っ先に浴室に飛び込んで迷宮で狩ったモンスターの素材で何かを造る筈の彼女なのだが偶に一緒に潜った冒険者とそりが合わなかつたり、何も収穫が無かつた時等はこうして店のお酒で自棄酒をする。

「銀子さん、またですか？」

そんな銀子さんの行動に溜め息を吐きながら摘みを差し出す僕の目には先程から銀子さんが浴びるように飲んでいるお酒の値段を見て大体のことを理解した。

あまり高くないお酒を飲んでいるからには恐らく同行者の行動が気に食わなかつたか或いはその同行者が非道い失態を犯したかだ。と睨んで見る。

前回の荒れ様を見ての経験眼から見てみたが昼は喫茶店、らじく銀子さんはつーとか唸りながらグビグビとグラスを煽る。

幸い昼のピークも過ぎたからか客足は途絶えていたが夜は酒場としている店の店長が昼から飲んだくれていては世間体といつものがあるので勘弁してもらいたい。

若干朱の差した頬で此方を見上げる銀子さんに胸はときめいたりするのだが先程の？んだくれている彼女を思い出すと僅かではあるがその熱も冷める。

「聞いてよゆー君ー…あいつ新参者の癖に『俺達のパーティーに女はいらない！』とか言い出すのよおつー…」

思わず握り締めたであらうグラスがギシリと危険な音を発する。

：テーブルに叩き付けて割る程まではいかないが相当怒っているらしくグチグチと言える限りの文句を咳きながら摘みをぽりぽり摘む彼女に適当な相槌を打つて僕は小さく溜め息を吐く。

さつと一皿が終わればいいのにと祈りながら。

第一話 暫茶 蒼翠（sooun）開店つめか。（後書き）

拙い文で「じやこ」ましたがどうでしたでしょうか？

楽しめていただけたら幸いです。

誤字脱字などありましたらい報せください。

第2話 お金の価値（前書き）

今回はお金の価値について。
計算が面倒… げふんげふんで日本円にしました。
まあ、色々ありえないかと思いますが其処はご容赦を。

第2話 お金の価値

この世界に来て吃驚したのがお金の価値だ。

普通こうこう異世界物の小説だと金貨とが銀貨とか銅貨とかでちょっと分かりにくかったりするものだがなんとここのお金の値は円と呼ぶらしい。

銀子さんのKYOUKUの中にはこの世界の情勢、地理、歴史、一般常識等多岐に渡り、更には魔法知識、護身術と称した“何か”と安く質のいい卸店や近くのおいしい食堂など必要なものから必要でないものまで教えてもらつてこる。

勿論その中にお金の価値というものがあつて聞いてみると日本と変わらない呼び方で呼称されているではないか！

計算しやすくて助かっているが何か訛然としない物を感じつつ僕は銀子さんから様々な事を教えてもらつた。

なぜここのお金の価値が出てくるかって？

うん、それはね…。

「てんちゅーつーお願い！…お金無いからツケといて…！」

冒険者になると財政難からか」つこう客も出でくるのだ。

勿論、こいつは客は極少数であり、普段からキッチンと計画を立てて迷宮に潜って無駄遣いをしなければこいつはならない。

「…アーベ、君は先用も同じ事を言つてそのツケを払つていないじやないか。」

溜め息を吐きながら無駄遣い冒険者の一人である田の前の青年を睨み付ける。

彼の無計画では磨きがかかるつており、よく組んでいるパーティーリーダーの話では『奴に財布を握らせると碌な事が無い』と言わしめる程。

本人は褒められたーと喜んでいるがパーティーメンバーの揃つて出した溜め息に思わずエール（この世界のビールみたいなもの）を一杯奢つた程だ。

そんな彼が笑顔で来月には払うと言つてはいるが信用できるか？いや、出来ない。

しかし難儀な事にもう調理した食事を食べた後でそれを見計らつていうあたりまだ好感は持てる。

食い逃げするような奴なら容赦なく『OHANASI』をしたんだが…

ふう、と溜め息を吐いて手を差し出す。

アーベは笑みを浮かべて手を握る。

ふざけんな。

「誰が握手すると言つたー。わつわと耳揃えて金出さんかいーー。」

「だからお金ないつて…」

やかましいー。そう心で毒吐きながらあからさまに溜め息を吐いて妥協案を出す。

「無いなら物でもいひつて銀子さんが言つてただろう。」

「おおー…やつこやあそっだなーー！」

かつかつかつ、と笑いながら腰のポーチからナイフを取り出すアーベ。

それを受け取り鞘から刀身を抜き出して判る範囲で検分する。

特に汚れらしい汚れも無く割りと丁寧に扱っている事が伺える。

まあ、自分の命を預ける獲物だ、大事にしない奴が居ない。とも言ひ切れないが状態の良いナイフに普段のアーベの急げているイメージからかけ離れた整備のされたナイフを見て十分と判断した僕は先月分もこのナイフでチャラにすることにした。

「…」しげだけの状態なら先月分もチャラにしてあげるよ。」

「おーそりや助かる…！」

相場から考えてもナイフは安物の新品で大体2万程の値段である。中古品だとしても1万～1万五千円程の値段であり、新品だとしても先月と今月のツケをギリギリ払えるか少し少ないくらいのツケが溜まっている訳ではあるがまあ、そこは友情価格とか憐れんだ結果と言つか…。

少し意外な友人の一面を見た僕は少し上機嫌で彼にドリンクを一杯サービスする事にした。

アーベと世間話をしながら最近の話題を取り込み、幾つか目新しい情報を買い付けながらグラスを磨いていた。

既に昼のピークは過ぎ去って店内には数えるほど的人数しか居らず、それも常連ばかりで外の喧騒とはかけ離れた静かな店内にコーヒーの香りと周りの客に配慮した僕達の話し声が店内に響く。

意外と大声で騒ぐイメージのあるアーベであるがこいつは意外と周りに配慮する心遣いを持つていて意外と礼儀も正しい。

黙つていれば眼を引く赤毛の碧眼の美男子ではあるのだが普段の金遣いの荒さに振られること數十回。

その度にウチにやつてきては自棄酒を煽りそしてツケを貯めて行く

と。

まあ、まだ本人は若いんだしそんなに早く身を固めなくても、と何気なく言つた事もあつたがアーベは苦笑を浮かべて色々あるのさ。と格好良くグラスを煽つた姿に嫉妬した。イケメンは滅べ。

まあ、兎に角冒険者なんて危ない職業をしているぐらいだ、僕がとやかく言つ事は無いと自己完結してふと鳴つたドアベルに反射的に「いらっしゃい。」と声を掛けた。

来客は店内を一瞥し、一人納得したように頷くとカウンターに座つて言い放つ。

「店主よ、ここに来れば『紅眼の銀狐』に会えると聞いたが?」

黒いゴスロリを着た金髪ツインテールロリの言葉に顔を顰める。笑いを堪える意味で。

『紅眼の銀狐』…銀子さんの一つ名である。

そんな一つ名を聞いて大笑いした時の銀子さんの恥ずかしそうな表情でビームをバカス力打ち込まれた日には死を覚悟した。今でもその名前を聞くと大笑いしそうになる。ふきゃー。的な意味で。

顔を顰めた僕に怪訝な表情を浮かべる幼女に僕は表情を緩めてグラスを置くと眞面目な表情で問い合わせる。

「どうして銀子さんに会いたいのかな？」

「「つむ、ワシはな…『紅眼の銀狐』が欲しいんじやよ。」

真面目な話と言つ事で席を離したアーベに心で感謝しつつ幼女の答えを吟味する。

ふむ。と思考する僕に幼女は思い出したように声を上げた。

「わう言えば名乗つてなかつたの…ワシは「お嬢様あつ…」…「…ヒ、なんじや…げつ…！」

バタンとドアが壊れるんじやないかと言つ程の勢いで開かれ、荒い息を吐くメイドが現れた。

メイドはノシノシと大股で幼女の傍に立ち、幼女の首根っこを掴んで此方に優雅な礼をした後に凄い速さで去つていいくという荒業をやつてのけたのだ。

ドップラー効果を残して幼女の悲鳴が聞こえたが僕は何も見なかつたことにして開いたままのドアを閉めた。

後ろではアーベが腹を抑えて笑いを堪えていて周りの客は何事も無いかのように思い思に過ごしているのが腹立たしいと感じた日だった。

「アーヴィング……」

名前を聞くのを忘れていたと思いついたのは帰ってきた銀子ちゃんと
晩酌をしている時だつた。

第2話 お金の価値（後書き）

次回は文字についてでも説明しようかと。
暫くは説明が続くのでプロローグ的なものだと思ってください。

第3話 文字の違い（前書き）

今回は文字についてです。
作中で説明しますが、都合主義ありますぐりです。

第3話 文字の違い

「やあ、ユウ。久方ぶりだね。」

にこやかな笑顔でやつて来た来客に僕もにこやかな笑みで返すと暇つぶしに読んでいた本に栄を挟んでテーブルに置いてお冷を一杯、彼女の前に差し出す。

白磁のような白い肌に蜂蜜を溶かした様な金髪に空のよつに青い瞳。
街を歩けば10人の中9人は振り向くであろう美人の女性はある種族特有の耳をしている。

そう、所謂エルフという奴だ。名前はフイリアさん。

彼女達はその美貌と魔力の高さから少し…いややかなり選民思想な人が多く、大概は他種族を嫌つて森で生活している。

その中で選民思想の無い変わり者のエルフ達は街に住んで冒険者や魔術師として生活する者達が多い。

フイリアさんは後者で良く銀子さんと組む事が多く、来た初めの頃はその美貌に見惚れてよくからかわれた。

「ユウ、ランチセットを一つ…と、また君はそんな物を読んでいるのかい？勉強熱心な事だ。」

「ははは、僕にとっては興味深い事ばかりなんですがね？」

苦笑を返しながら置いていた本を仕舞つて調理場に移る。

調理中に話しかけてくる事も無く、静かに本を読むフィリアさんを横目に何のタイトルを見ているのか気になった。

魔道書など、古代言語が書かれている品物は出回ることが少なく、迷宮でしか見つけられない事もあり、大体がこの街の王宮研究室に保管されている。

稀に隠し持つて帰つてくる冒険者がいるが、古代言語が読めずに結局手放すと言う事も多い。

一度だけ銀子さんに見せて貰つた事があるが思いつきり日本語だつた事に吹いた。

銀子さんは苦笑しながら『読める事は秘密にしつかないと面倒な事になるから秘密にしどきなさい。』と言わificateからこの国の共通語を教えてもらつた。

この世界は一つの大陸であり、神が作り上げた平面図に大陸があつて総ての国が一つの大陸の中に詰まっていると言われている。

それ故に地図もこの大陸しかなく様々な種族が暮らしているが故に共通語を作ることにしたのだ。

エルフ、ドワーフ、ホビット等、人間に近い格好をしている亜人族。

ワーウルフ、ワーキャット、ドラゴニアス等、人間とは違つた顔付きの獣人族。

そして人間族。

大別して3種類に別けられるのだが、その中で最も多い人間族の文字、言語を共通語とするこことしたのだ。

亜人たちの使う言語は僕達の元の世界で使う英語に近いものがあり、獣人が使う言語は中国語に近いものがある。

人間たちが使う言語は日本語に近いものがあるが、文字は全く違うものでローマ字になつてしているのだ。

本にすると読みにくい事この上ないが慣れればどうと言つひとは無く、銀子さんから借りた歴史書や魔道書を読む事が僕の趣味の一つと言つてもいい。

それぞれ方言みたいなものもあるがここは割愛させていただく。

出来上がった料理をフイリアさんの前に置くと、彼女は読んでいた本を肩掛けかばんに直すとエルフ独特の食前の祈りを捧げてフォークを手に食べ始める。

つぐづくお金の価値や文字や言語を考えるとおかしな世界だなと思いつながら僕は洗い物を片付ける事にした。

チリンと鈴の音が鳴った。

フイリアさんと少し世間話をして彼女が店を出てから数分後にはそんな音が聞こえた。

ふとドアを見るが来客ではなく、僕は首をかしげる。

チリンと再び僕の足元で音が鳴り、足元に視線を向ける。

「いやー。」

そこには小さな白猫が手紙を咥えて座っていた。

僕はしゃがみ込んで猫と視線を合わせると猫は手紙を僕に押し付けて消える様に何処かへと去つていった。

「…ふむ？」

押し付けられた手紙には宛名も無く、可愛らしい薄ピンクの封筒の裏側の文字を見て僕は頭を抱えた。

第3話 文字の違い（後書き）

続きます。

第4話　迷宮とは？（前編）

第4話　迷宮とは？

封筒を開けて手紙の内容を確認した僕はせつせと迷宮に入る準備をして荷物をリュックに詰め込むと店の看板を『Clow』にして戸締り、火元の確認をするとドアに鍵を掛けて迷宮を封する。

ここ迷宮都市ではいくつかの迷宮があり、東西南北に一つずつ迷宮が存在する。

迷宮にはそれぞれ難易度みたいなのがあり、それぞれランク付けされている。

東の『青龍の迷宮』西の『白虎の迷宮』南の『朱雀の迷宮』北の『玄武の迷宮』とあり、北 南 西 東の順番にランクが上がっていく。

五行説だと中央に黄龍が来るんだけどと思わず突っ込みそうになつたがなんともまあ中国的と言つか日本的と言つか…

兎にも角にも僕が目指すのは北の迷宮であり、手紙の差出人である銀子さんはいま北の迷宮に潜つてお昼ご飯を所望しているらしい。

折角机の上に置いていたのにそれを持つていくのを忘れたらしく使い魔（白猫）を使って僕に持つてこさせたのだ。

基本的に迷宮に潜るにはギルドに所属しているかギルドに所属している冒険者が護衛に就いていないと入ることが出来ない。

しかし北の迷宮は1～2階層のみ危険なモンスターも居ないということで、一般人にも開放されており、2階層から下の階層に降りる入り口には一般人がこれ以上進めないように常にアルバイトの冒険者が待機している。

とはいっても1～2階層にモンスターが居ないとは言い切れず、入り口から一般人を護衛する為の冒険者のパーティーも常に3グループ程度待機しており、新米パーティーの大変な収入元の一つでもある。

ちなみに護衛する冒険者が集まらないときは都市にいてる冒険者にギルドから通達が来る事もあり、今日は銀子さんが所属するパーティーが呼びれたりする。

まあ、そんな所でもない限り自分が迷宮に潜ることは無いと思いつがらのんびりとした歩調で北の迷宮を目指す。

迷宮の入り口で待機していたパーティーに護衛を頼んで3階層の入り口まで案内してもらう。

道中角の生えたウサギや一足歩行の犬を倒し、素材を剥ぎ取りながら2階層まで進む。

新米パーティーだから手際はいいとはお世辞にも言えなかつたが前衛3人、後衛2人とバランスも良く、問題も無く3階層の入り口に到着した。

護衛してくれたパーティーに礼を述べて、3階層へ降りる階段の横にあるドアをノックする。

中から返事が聞こえて出迎えてくれたのは銀子さんだつた。

後ろを覗き込むと同じパティーメンバーである大剣を磨いてる黒髪の青年と「の弦を張り直しているファリスさん、杖を横に立て掛けて本を読んでいる赤髪のセミロングの女性が此方に少しだけ意識を向けて各自元の行動に戻つた。

何時もの事なので気にせずに銀子さんに昼食の入ったバスケットを手渡すと部屋に招かれ、全員分のお茶を淹れる。

「いやあ～、助かったわ～。」

「これで何度目ですか…全く…。」

はぐはぐとサンドウイッチを頬張る銀子さんに苦笑を浮かべながら手元のカップに注がれたお茶を冷ましながら嘆息するという器用なことをするファリスさん。

照れた様に苦笑する銀子さんに皆が笑いながらそれに好きな事

をして時間をつぶす。

時間的にもうすぐ別のパーティーと入れ替わると言つ事で帰りは銀子さんと一緒に帰ることとなつた。

「よーし、そろそろ交代だし帰ろつか

うーん、と先程まで寝ていた身体を起こすと銀子さんは身体全体を解す様に動かすと立ち上がりリュックを掴もつとしてドアを蹴り開ける。

その突然の行動に吃驚する僕を他所に他のメンバーも手信号と田で合図を送り、フィリアさんが僕を護る様な立ち位置で弓を構える。

「悠人は銀子を追つて、エリスは回復魔法の準備！」

「…」了解。

「おつけ。」

二人は短く了解の意を示すとそれぞれの役割を果たす為に行動するのだった。

第4話　迷宮とは？（後書き）

次回は戦闘描写だから時間かかるかも（汗

第5話 現実と夢幻（前書き）

就職活動の為暫く書けませんでした。
申し訳ありません。

3階層へ続く階段から昇つて来たのは傷だらけの冒険者たち。

中には片腕が在り得ない方向に捻じ曲がっている者も居り、その光景に思わず口元を押さえて吐き気を堪える。

何があつたのか判らないが彼らはナニカから命からがら逃げてきたのだろう、近寄ってきた銀子さんと悠人さんを視界に納めると氣を抜いたのか崩れ落ちるように座り込んだ。

「何があつたの!?

「……ジャイアントオークが……2匹……上の階層まで……」

ジャイアントオーケ、豚に酷似した頭部に平均全長4メートル程の巨体を持つモンスターで手に持つた棍棒を力の限り振り回して攻撃していく。

彼らは基本的に10階層から15階層をうろつくモンスターなのだが、何かしらの理由で上の階層まで昇つてきたらしい。

知能は低く、食欲旺盛な為、餌を求めて昇ってきたと考えられたが原因等わかるはずもなく、エリスさんが怪我人を回復魔法で治療して詳しい話を聞いている。

まだ治療途中の為、余りにも多い血の量や、怪我のグロテスクさから眼を逸らす為、ジャイアントオークの方に視線を戻す。

悠久さんと銀子さんの拳でボコボコにされているジャイアントオーク。

悲鳴を上げて絶対強者の二人から逃げるように棍棒を振り回している彼らにどちらが化け物か判らなくなる光景にこめかみを押さえる。

命からがら逃げてきた冒険者たちは目の前の光景に睡然としており、僕はただただ溜め息を吐くしかなかつた。

ギルドにジャイアントオーケーの件を報告し、銀子さん達と家路に着く。

辺りは既に暗く、近くの酒場では冒険者たちの笑い声や喧嘩の音、野次の声が聞こえてくる。

少し視線を外せば広場では恋人達が愛を語り合っているのだろうベンチでイチャイチャしてこるのが見える。もつげーる。

ふと空を見上げる。

前の世界では見る事の無かつた二つの月。

赤い月と青い月が重なるように浮かんでこる姿にびっくりの世界は異世界なのだと知られる。

此方に入るまではただの学生だった自分が今ではこうして異世界で助けられて喫茶店のマスターを手伝っているところに未だに信じられないでいるのである。

ふとした拍子に気が付くと自分の部屋で寝ていてこの世界での事が夢だったんじゃないかと思つてしまつ。

そしてこれが夢だったら良かったのに、とそんな事を考えてる自分

に気付いて思わず苦笑してしまう。

「…なあにクスクス笑ってるのよ？」

そんな僕に気付いた銀子さんがからかう様に肘で小突いてくる。

僕より頭一つ小さい身長なのに何倍も大きいジャイアントオーケを拳一つで黙らせてしまう事実が僕の夢なんじゃないかとこう想いに拍車かかる。

しかし今こいつして話している彼女は正しく現実にいる人物で、こいつして触れ合えている事に何処か安心してしまつ自分が居た。

「いえ、やっぱり銀子さんは銀子なんだな。」

「何よそれえ。」

残して来た物は多いけれども、なんとなく…そう、なんとなくだけれどもこれからこの世界で頑張って行こう。と思える口だった。

第5話 現実と夢幻（後書き）

戦闘描写無理です。orz
慣れるまで戦闘描写書きません。

第6話 ギャップ萌え？

キコツとグラスを磨く音が店内に木靈する。

閑古鳥が鳴くとはまさにこの事かと考えながら本田何度も溜め息を吐く。

外は快晴、雲ひとつなく青々とした青空が広がっており、道行く人々は皆幸せそうに笑顔を浮かべて歩いている。

それをカウンターからぼんやり眺めながら再び溜め息が漏れる。

「へへへ。」

ポカリと頭をお盆で殴られる。

振り返るとお盆を振り抜いた格好で銀子さんが立っていた。

「溜め息を吐くと幸せが逃げるらしいわよっ。」

銀子さんは陽光を浴びて光る銀髪を揺らしながら楽しそうに笑っている。

クスクスと上品に笑うその姿は一枚の絵画のように見える。

少し赤くなる頬を自覚しながら僕は苦笑を浮かべて答える。

「なら、もう僕に幸せは残つてませんね？」

「あら、こんな美人と一つ屋根の下で過ごしてるのは幸せとは言わないのかしら？」

悪戯っ子の様な笑顔を浮かべて僕をからかう銀子さん、それに苦笑でしか返せない自分に僕は少し情けないな。と思いながらもいつか見返してやると心に誓い磨いていたグラスを棚に戻す。

「あ、そつそつ私これから迷宮に潜るから暫く帰つて来れないから店番お願いね。」

ふと思いついたように銀子さんは手を打つとそんなことを言い出した。

まあ、時折こうして迷宮に潜つてお金を稼がないと店の経営も成り立たないのでだから仕方ない。

ただでさえツケを溜めていく客も居るのだ。アーベとか。

喫茶店だけではじつよつもない。

何時もの事なので僕は首肯し、銀子さんから店の鍵束を預かる。

「それじゃあいってきま～す。」

銀子さんはエプロンを脱ぐと椅子に掛けてあつたコートを羽織つて

出て行つてしまつ。

冒險者にしては軽装で黒いズボンにシャツ、ポケットの多いコートを羽織つただけで行つてしまつ。

一度キュリエルさんに聞いたことがあるがあの軽装だけで迷宮に潜ること自体がありえないとか。

低階層の上層部…つまり1～3階層目ぐらいは成人男性がある程度の装備を纏つて一人で探索出来るレベルなんだとか。

銀子さんは常に一人で潜るらしく時折中階層でも見かけるらしい。

大丈夫なんですか？と聞いた事もあつたが銀子さんは何食わぬ顔で「大丈夫よ。だつて私バグキャラみたいなもんだし。」って笑顔で答えていた。

それ故に心配するのも無駄だと諭されてしまい、今はこうして銀子さんが潜ると言つ時は大人しく鍵を預かつて銀子さんの帰りを待つ事にしているのである。

：決して護身術の訓練で目の前で指からビームみたいなのを出した銀子さんを思い出したからではない。

夜になると都市の雰囲気も変わる。

一般人はそれぞれ家路に着き、冒険者たちは迷宮から帰還して今日の収穫を都市に還元するのだ。

勿論我が喫茶・蒼翠も夜になるとメニューを少し変えてアルコールを出す事にしてくる。

日中は特に無いが夜になると冒険者といつ荒らくれ者達が来ることもあって柄の悪い客が多くなるのは致し方がない。

しかし、と思ひ。

「なあ、マスター？聞いてる？」

「ええ。聞いてますよ？」

「なら早く紹介してよ～、俺これから魔王を滅ぼす為に仲間を探さなきやならないんだから～。…あ、出来れば可愛い子で。」

突然来たこの少年はやつてきていきなり「俺は魔王を倒す勇者だ！共に旅する仲間を紹介してくれ！」って元の世界では厨二病と言われる様な妄言を吐いてきたのだ。

あれか？ドラ エか？と思はしたが生憎家は喫茶店だ。

夜になるとマルホールは出すが飽くまで喫茶店である。

言わせてもうえば物凄く面倒だ。

周りの客も一いや一やは此方を肴に酒を飲んでる始末。

とにかく僕自身も相手するのにかなり面倒臭くなってきた。

そもそも魔王って何だ魔王って…。

「出来れば僧侶とか欲しいんだけど…あれ？もしかして始まりの街だから戦士しか居ないとか？…まあ、いいや兎に角一緒に旅する仲間を紹介してくれって！」

「お客様。一応ここには喫茶店でして…そういうパーティメンバーの募集はギルドの方で受け付けていますのでそちらにお行きください。

」

「は？だつてここ酒場だろ？仲間を探すなら酒場っていうのが基本じゃねえか。」

何を当たり前な。みたいな顔をされても困るんだがな…。

しかも遠く離れた席でこっち見てゲラゲラ笑つてる常連もいるし。

はあ。と溜め息を吐くと来店を告げるド・アベルが鳴り、金髪の剣士がまっすぐにひざに向かって歩いてくる。

少し吊り眼の成年男性よりも僅かに高い身長。すらりと伸びた足に身体全体を覆うプレートメイル、腰まで届く金髪に深紅のマントを靡かせる彼女にヒューと誰かが口笛を鳴らす。

街ですれ違えば殆どの男性が振り返る美貌に親しい者に向ける笑みを浮かべて彼女はカウンター席に座ると慣れたように500円玉を僕に弾くと少し低めのハスキーボイスで注文する。

「マスター、息災かい？何時もの…頼めるかな。」

「畏まりました。僕は何時もと変わらずですよ、ファリスさん。」

弾かれた500円玉を中空でキャッチし、僕は厨房に立つ。

そんな仕草が様になるファリスさんの登場で僅かに納まつた喧騒、それを裂く様に先程の少年が熱心にファリスさんに声を掛けていた。

「やつぱり主人公の前には主要キャラが来るってかあ…お、お姉さん！俺と一緒に冒険に行きませんか！？」

「……君は？」

警戒心を顕わに応対するファリスさんに少年はまるで気付かず、一気に捲くし立てる様に言葉を紡ぐ。

聞き取れたのは少年が二下みした 一流かずると言つ名前と自称勇者。それから

魔王退治に行く為にファリスさんの力を貸して欲しい。

とまあ、妄想癖のある少年だと結論付けて僕は出来たばかりのバスをファリスさんの前にそ、と置き困った様にこちらを見るファリスさんを助けるために自称勇者に向き直る。

「お客様、他のお客様の迷惑になる行為はやめていただけませんかね？」

少し怒氣の籠もった声で告げると自称勇者はう、と呻くとそれから店の端っこに寄つてしまつた。

むしろ出て行けと思いながら溜め息を吐くとすまなさそうな表情のファリスさんと眼が合つ。

「すまないね、マスター。」

「いえ、少しばかり眼に余りましたから。」

ファリスさんに苦笑を浮かべて応えると手元のグラスを拭き直す。

これでも初めの頃のファリスさんに比べて話す様になつた。

元々の性格が彼女は人見知りが激しくて話すまでに幾許かの時を要した。

何しろ注文もモゴモゴと口の中で呴いて聞き取りにくかつたし、料理を持つて行つてもビクビクしていたし、声を掛けたら悲鳴を上げて店の隅まで逃げて観葉植物の裏に隠れるし、なにこの可愛い生き物。って思ったくらいだ。

あんまりにもあれだつたから銀子さんがそつまでして此処に来る理由を聞いて何か邪な笑みを浮かべていたので気になつた僕が理由を聞いたら顔を赤くして昔みたいにモゴモゴと詰まつてしまつ為に結局聞けず仕舞いである。

機会があればもう一回聞いてみよつと思つただが…

「うわわわ、マスター。」

と、そこまで考えてファリスさんが空の食器を手に立つていた。

僕はそれを受け取つて流しに置くと食後のデザートの自作のチョコケーキを差し出す。

それを見てキラキラと眼を輝かせてストン、と席に座つてフォーケを構えてケーキから眼を離さないファリスさんに癒されつつ食器を洗い出すのだった。

第6話 ギャップ萌え？（後書き）

表現力不足ですか。○○
もう少しあと精進します。

第7話 値値観（前書き）

おこりのこじ成分低めです

第7話 値値観

麗らかな午後のティー・タイム時。

カラントドアベルがなり、来客を告げる…そこから現れたのは深紅の鱗を纏つた龍人・ドラゴニアスと呼ばれる種族の青年だった。

「いらっしゃいませ。」

来客を迎えて、僕は手に持つたグラスに態とベタベタと指紋を付ける作業を一時止めて彼の手元の袋に視線を奪われる。

「やあ、店主…相変わらず客が無くて暇そうだね。」

獰猛な…ドラゴニアスの觀点で見れば爽やかな…笑みを浮かべて彼、ラニースは手に持つた袋に手を突っ込んで中身をカウンターに広げ始める。

「相変わらずって…君が来る時間帯がたまたま客が来ないだけだよ。」

「

「ふーん、まあ、そういうことにしておくよ。」

苦笑を浮かべる僕の言葉を軽やかにスルーして彼は鼻歌交じりに袋から次々と荷物を取り出しては並べていく。

彼が取り出しているのは数種類のハーブと薬草等の植物が多くを占めていた。

一部鉱石や装飾品もあるが殆どが植物でこの地域にはあまり生えていないものが多い。

「いつもありがとう、ドライアス。」

「なに、里帰りついでに友人に頼まれたものを採つて来ただけだよ。」

獰猛な…ドライアスの価値観では柔軟な…笑みを浮かべて彼は席に着く。

そんな彼の目の前に全長60センチはあるパフェを置き、彼が持つてくれた薬草やハーブを厨房裏に持つて行き、後で選別作業をする為に机に置いておく。

厨房裏から出てくると獰猛な…ドライアスの觀点では嬉しそうな笑みを浮かべてパフェに食らい付く彼を見て苦笑を浮かべる。

ちなみにこの時間帯にお客が少ない、又は来ないのは彼がこの時間に顔を出すからだとは口が裂けてもいえない。

ドライアスという種族は簡単に言つて「足歩行をするドライアスである。

どちらかと言えば西洋のドラゴンに形が一番近く、彼らの特徴といえばその属性毎に鱗の色が変わるのである。

赤ならば炎、青ならば水、翠なら風、茶なら地とそれぞれに分かれていって、鱗の色が鮮やかであればあるほど彼らは力強いのである。

近接戦闘を好み、闘争本能が強い彼らが一人でもパーティーに居ればそのパーティーランクは一つは上ると言わしめる程に彼らは強い…が、その見た目からか中々パーティーメンバーに誘われることが無く、大抵のドラゴニアスは一人で行動しているのが多い。

ラニアス曰く、笑顔を浮かべるといつ食われるか判つたものじゃない。と言われて断られ続けたらしい。

今では悠久さんのパーティに入ってるラニアスであるが入るまでは人間不信に陥る一步手前だつたとか。

上記の理由によつて人間不信になる事も少なくない彼らの生息地にはこの迷宮都市付近では手に入らないハーブや薬草がたくさん生えているので月に一回ラニアスが帰省する度にこうして採つてきてもらい、その値段相応の食券を渡しているのだ。

現金を渡そうとしたらラニアスは「タダ同然で手に入れたものだしそれは悪い…現金より甘い物が食べたい。」と憚猛なしつこいがドラゴニアスの觀点で見ると朗らかな笑みでそれを一蹴、ならばと渾身のパフェを作り上げて彼に出すと非常に喜んで頂き、それ以降彼への報酬は全長60センチのパフェとなつたのだ。

再びドアベルの音が鳴った。

「あー！お父さん帰つてきてたのーっー？」

「ラ、ララー？」

ドアを開けて飛び出してきた幼女はラニアスの姿を見つけると電光石火の勢いで飛び掛る。

そう、この事から判るように彼、実は既婚者なのだ。

相手は人間の女性で結婚した理由が「私、爬虫類って好きなのよね」とあんまりにもあんまりな理由で結婚したらしい。

なにより人間の男より爬虫類が好き！と公言している辺りどうかしている。

そんな夫婦の間に産まれたのが目の前の幼女、名をララと書く。

母親譲りの美貌に父親譲りの真つ赤な髪、耳の後ろから生えているドラゴニアスの象徴とも言える枝の様な角にお尻から生える真つ赤な鱗を纏つた尻尾。

俗に言うハーフドラゴニアスの彼女はその外見からは想像も出来ないがかなりの力持ちである。

この間も僕のお手伝いするー。と言つて僕が持ち上げられなかつたお酒の入つた樽を軽々と持ち上げた事は記憶に新しい…あれ?何故か眼から心の汗が…つ。

それは兎も角そんな彼女が電光石火の勢いで父に飛び掛つたのだ。

まるでガードレールに思い切り突つ込んだ車の様な音を立ててラニアスの胴体にしがみ付くララ。

具体的に言つとドガツ！とかいう音が聞こえた。

それでも体勢を崩さない辺り流石と言つかなんと言つか…ラニアスは獰猛な…ドラゴニアスの觀点で言つとデレデレした…笑みを浮かべて娘の頭を撫でていた。

もう何と言つたか人間もドラゴニアスも男親は自分の娘には甘い物だと僕は苦笑を浮かべるしかなかつた。

次の日、朝早くララちゃんは店の前に立つていて僕のお手伝いする。と言つて勝手知つたる人の家とばかりに酒蔵に入り込んで僕一人では持てない酒樽を店の厨房まで持つてくる作業を手伝つて貰つた。

：人には向き不向きがあるんだよ。

手伝つて貰つたご褒美にお父さんと同じパフェを差し出すとそれはもうキラキラした眼でぱく付いていた。

：べ、別に泣いてなんか無いんだからねっ！

ちゅうと鍛えようかなと思つたのは僕の秘密だ。

第7話 値値観（後書き）

おにぎりのこ成分が……つ！足りないつ！！

第8話 口リ、再び（前書き）

口リ再び

第8話 口リ、再び

嫌な予感を感じた僕は毎のピークを過ぎたぐらいで店を閉めようと準備し始める。

しかし無情にもカラント・アベルがなり、この間やつておらずメイドに連れ去られたツインテールロリが居た。

「来てやったのじゃー！」

凄く…偉そうです…。

「で？」

暫く踏ん反り返つて此方を見下ろすと頑張る口。

身長差でどうしても見下ろしてしまう僕の視線に耐えかねたのか口
はいそいそとカウンター席に座ると机をバンバン叩いて駄々を捏
ね始めた。

「店主ーワシは『紅眼の…』あ、メイド。」ひいいいつ…ワ、ワ
シはまだなにもしておらんだー・マリアー…」

銀子さんの厨一的な一つ話を言おうとしたので後ろを指差してメイ
ド。と言つと面白いくらいにほえて頭を抱えていやいやと首を激し
く横に振つてこる。

…何故か悪い事をした気分になるのは何故だらつか？

とこうよりそこまでメイドに法える口つに普段何をしてこのか凄
く気になる。

…奴になるといえば…。

「やう言えばまだ君の名前、聞いてなかつたね。」

その言葉に口りは顔を上げると涙田で此方を見上げて震える声で問
う。

「ぐすり…マリア…いない…？」

普通にしてれば可愛い子なんだけどなあ。一人称があれだけど。

「ああ、いないよ。」

そう首肯すると恐る恐る後ろを見、僕を見上げて…いきなり僕に殴りかかりに来た。

「ば、馬鹿者…驚かせるで無いわっ…！」

ぽかぽかと殴りつけの口を落ち着かせるのに多大な労力を割いたがここには割愛する。

…決してお菓子とかで釣つてないよ？

釣られたクマー。

「ワシの名はクラウディス・アルマナ・オルトーンである。」

田の前で口リが二口一口とケーキをぱくぱくしている。

ほっぺたに付いたクリームをそのままに召乗る姿は微笑ましく、しかし態度はでかい。

しかも名前が長い。もう口リでいいや。

「で、その口リは銀子をどこで借りておられるの？」

溜め息と共に呟いた僕に口リはその柳眉を跳ね上げる。

「ワシの名は口リではないーークラウディスじゃーー言へ難ければラディスで構わん！」

「はいはい、で、口りは何の為に…」

「モニターリング」

凄く面白いです

も、と今の僕の顔は物凄く悪い顔をしているだろう。

そうやつて暫く口りをからかつているとドアベルが鳴り、息を切らせたメイドが入つてくる。

お嬢様あああああつ！！またここでですかあああああつ！！」

ドカバキイツ！ヒドアを蹴り破る…というより蹴り破つてやつて来たメイドはゼーはーと息を切らし、口リを視界に納めるとその身体を片手で持ち上げて米俵の様に担ぎ上げると優雅に此方に一礼すると物凄くいい笑顔で…

失礼いたしますわ。

そういう残して嵐の様に去つていつた。

薄ら寒い笑顔に胃痛と頭痛を感じ、その痛みに顔を顰めた。

溜め息を吐きながらロコリとワーティスが咄嗟に食べきったのである
うケーキの食器を片付けるとある事を思い出した。

「お勘定、払つて貰つてないや。」

ドアを見るとドアガラスが砕け散つていた。

…そりやあんな勢いで蹴り開ければねえ…。

収まらない胃痛と頭痛に顔を顰めつつ僕は箸と塵取りを取りに倉庫
へ向かつ。

後日オルトーン家にガラスの請求代とケーキ代の請求を行つのだつ
た。

第8話 口リ、再び（後書き）

口りつ娘、参上！

よりやひと名前がきみ（ry）

第9話 縁日（前書き）

今日は縁日があつたので行つて来ましたw

一人寂しく（おい

第9話 縁日

「おい！縁日に行こうぜ！ー！」

突然だが今日は縁日である。

昼のお客様を捌き切った直後に来店したアーベから縁日に誘われた。

突然なので店を急遽閉める訳にもいかない為、銀子さんに相談することにした。

「え？縁日？行く行く！！」

と、物凄い乗り気でのんびりとコーヒーを飲んでいた常連を追い出
して奥から何着もの浴衣を引っ張ってきては店の鏡の前で一人ファ
ンションショーをしている。

常連に物凄く申し訳ない気持ちになりながら頭を下げる。「いつも
の事だから気にしないよ。」と笑顔で去つて行つた。しかしあお金
は払わず。

流石に追い出した手前請求出来ないのでしかしてそれを狙つてる
んじや…。と邪推もしたがまあ、悪いのは此方なのでなんとも出来
ず…僕は嬉しそうに浴衣を着替える銀子さんを眺めた。

銀子さんは長い銀髪を結い上げて普段とは違つ衣装を身に纏つてい

夕方、日も暮れて祭り独特の空氣が辺りを包み込む。
元の世界でも良く見たかき氷に焼き鳥、たまごせんべえ、りんご飴
に綿飴や射的など様々な露天を銀子さんと並んで歩く。

る為か隣に立つだけでドギマギしてしまひ。

手には綿飴、イカ焼き、りんご飴、ヨーヨーにフランクフルト、たこ焼きにチョコバナナと器用に両手で総て持っている銀子さん。

頭にはお面が被さつており、幸せそうに綿飴を頬張る彼女は何時もの凜々しい顔付きとは違つてとても新鮮だつた。

僕の手には先程出店で買ったラムネが握られており、僕の隣にいたはずのアーベは早速ナンパへと勤しんでゐる。

こんな所まで来て何をしているのかと注意したのだが彼は「ナンパせぬは男にあらず！－このリア充があつ！－」と訳の分からぬ事を叫んで涙を流して走り去つていった。

ちなみに祭りに行くと大概のカップルが多いよね？僕だけだろうか？そう思うのは…。

まあ、戦果は芳しく無いのか所々に声を掛けでは撃沈していくアーベに思わず苦笑してしまつ。

「あ、ゆーくん、今度はあれ食べようよ。」

銀子さんはマイペースに次の獲物（焼きソバ）をロツクオンすると僕の手を引っ張つていく。

なんか気分は祭りに無理やり連れて来られたお父さんの気分だ。

祭りの醍醐味といえば、なんと答えるだらうか？

踊り？花火？それとも恋人達の語らい？

「偉い人は言いました。祭りの醍醐味は仲の良いカップルを引き裂くことだつ……」

「と、言つ訳で……」

何やら覆面を被つた変態^{アーベ}にいきなり肩を掴まれ……

「我等の嫉妬魂を受けるが……どうわつ……」

投げられそうな所を投げ返した。

まあ、馬鹿は放つて置いて祭りの醍醐味、個人的にはやはりその場の空氣というか活氣と言つか……まあ、雰囲気が一番好きなのである。

天に咲く華に踊る阿呆。

楽しそうにそれらを眺め、徳利片手にチビチビと酒を飲むのが一番好きなのである。

ガヤガヤと騒がしい街の中心で大きな篝火が灯されていた。
その篝火を囲む様に人々が思い思いに踊っている。
僕らは近くの芝生に並んで座つてそれを眺めていた。

「あら、今年は盆踊りなのね。」

銀子さんは何処からか徳利を取り出して既に一杯、？んでいる。

頬は上氣して艶っぽい空氣を出しているので結構？んだようだ。

僕は溜め息を吐き、銀子さんの手から徳利を奪い取る。

「あ～！句をするのよお～！」

「幾ら句でも？み過ぎです。」

「ふう～…。」

奪い取られた徳利を取り返そと腕を伸ばす銀子さんにから庇う様に徳利を隠すと銀子さんは子供の様に頬を膨らまして拗ねてしまつた。

思わず笑みが浮かんてしまい、それを隠す為に徳利を口元に運んで中身を一口飲む。

喉を焼くアルコールに思わず顔が少し歪んでしまう。

「ふふふ～、子供にはまだ早いわよ～。」

悪戯っ子の様な笑みを浮かべて僕から徳利を取り返した銀子さんはそのまま中身をきゅーっと飲み干して僕に寄りかかる。

お酒を飲んで少し体温が高くなつたのか汗ばんだ銀子さんの身体から僅かな酒気とちょっと甘い匂いがして少し鼓動が早くなる。

「ん…。」

もぐもぐと銀子さんは動くとそのまますう、と寝息を立ててしまつた。

肩に掛かる銀子さんの重みを感じつつ、空を見上げる。

今田の祭りでやまつ前の世界の事を思に出しちしまい。

何処か似てゐる為か余計にしつ感じてしまい、思わず涙が出来てしまう。

「…帰りたい…のかな…。」

ポツリと呟いた言葉は誰に聞かれるとも無く祭りの熱気に溶けた。

第9話 縁日（後書き）

リア充はもげてしまええつ！！（泣

第10話 ハーマンが…倒せない…（前書き）

題名とはあんまり関係ない。

第10話 エアーマンが…倒せない…

今日は、何故か視線を感じる。

何時もの様にグラスを拭いていると何処からか視線を感じる。

なんというか…。嘗め回すよいつな視線？

思わず背筋が冷えてしまった。

気を取り直すように拭いていたグラスを棚に片付けて自分の昼食用に作ったサンドwichを一つ摘んで口に放り込む。

サンドwichを咀嚼しつつ、カウンター裏の冷蔵庫からミルクを取り出してグラスに注ぐ。

行儀が悪いがまあ、いいだろ。と自分を納得させてカラント鳴つたドアベルに視線を向ける。

「いらっしゃいま…あれ？」

取り敢えず口の中の物を飲み込み、来客を迎えるとして違和感に気付く。

「誰も居ない？」

確かにドアベルは鳴った。

しかし肝心の来客の姿が見えない。

ふむ。と僕は思わず唸りてしまつ。

「…あ、あの…。」

と、物凄く小さな声が近くから聞こえた。

キョロキョロと辺りを見渡すが影も形も見当たらず、首を傾げる。

「あ…。」「…です…。」

取り敢えず声が聞こえた辺りまで行こうとカウンターから出て店内を歩き回り…

「やめ…。」

「つわづ…。」

何かにぶつかつた。

「いやあ、気付かなくてごめんね？」

「い、いえ…何時もの事ですから…。」

ぶつかつた何か…彼女はどうやら獣人らしく、名前をルーカ・トウリイトと言ひらしい。

僕の胸ぐらいの身長で翠の前髪が彼女の顔半分を隠してしまって少し暗いイメージを持つてしまいそうな少女である。

あれだけ鮮やかな髪なのになぜ気付けなかつたのか、と思わず唸つてしまふ僕に彼女はおずおずと口を開く。

「わ、私…す、ぐ、空氣だつて…み、みんなから…褒められて…ま
すから…。」

…それって褒めてるの？

思わず聞き返そうとしたけど何か本人が誇らしげに言つてるので言わないで置こうと思つた。

ので、話題変換も兼ねて取り敢えず注文を聞くことにした。

「そ、そうなのかい…それじゃ あ注文は何にする?」

「え……えっと……あの……その……。」

ビクビクと此方の表情を伺うルーニーに苦笑を浮かべてメニュー表を差し出す。

「……言い難かつたらここから指差して選んでくれたらいいよ。」

「あ……はい……それじゃ……これ……特盛で……」

指差したメニューはちょっと前にふざけて創った激辛カレーの特盛。

「……」れ、すゞく辛いけど……大丈夫?」

過去に一度アーベに無理矢理食べさせして病院送りにしたカレーである。

とてもじゃないがルニカみたいな子が食べれるものじゃない……と思う。

「だ……大丈夫……です……」

「そ、そう……分かった……少し待つててね?」

まあ、本人が大丈夫って言つてるし……メニュー表にも自己責任つて書いてるから……大丈夫……だよね?

「お待ちどうさま。」

持つてきた激辛カレーを彼女は受け取ると行儀良く手を合わせて「
いただきます。」と言つて食べるのだった。

この姿を数十分前の僕に見せてやりたい。

淡々と…激辛カレーを処理して行く姿に僕は戦慄した。

「…大丈夫？ 辛くない？」

「へ…平氣です…」

もくもくと食べる彼女の姿はリストみたいで可愛いのだが… 食べてる
物が食べてる物だ。

しかも特盛。

学生達の罰ゲームとして使われる程のメニューなんだけどなあ。と頭を搔いて一心不乱にしかも汗一つ搔かずに食べる彼女を見て鍋に少し残ったカレーを舐めて見る。

「…辛つ…」

慌ててわざわざ出したミルクを口に流し込んで辛さを中和する。

ちらりとルニーに視線を向けるとそれはもう幸せそうにカレーを頬張っていた。

すると彼女は「二二二」と…

僕は苦笑してお粗末様。と返してグラスを拭く作業を始める。

その顔は満ち足りており、美味しかったです。と笑顔でお礼を言わ
れてしまった。

「…、」馳走様でした。」

空になつた皿とスプーンを僕に返してくれるルニカ。

「…ま、また来ますね…あ、あと、お腹が…空きすぎて…サンドウイッチ…イッチ…勝手に食べちゃって…」めんなさー。」

「ん、またおいで…つてサンドウイッチ…？」

ふと僕の昼食用のサンドウイッチの更に皿をやる。

作った分は4つでその内皿にはもうサンドウイッチの影も無い。

そして僕が食べたサンドウイッチは…一つだけ…あれ?

「は、入つてから…き、気が付いてくれませんから…ドアを…もう一回…開けました。」

「あ、あはは…。」

僕はまだ苦笑するしかなかつた。

第10話 ハーマンが…倒せない…！（後書き）

これひどいたら寝ます。

第11話 剣の妖精？（前書き）

仕事に追われて書けませんでしたorz
しかも蓄膿症まで併発…もうだめボorz

第1-1話 剣の妖精？

「あ、剣が折れた。」

この言葉から今田の出来事は始まった。

それは何時もと変わらない日だった。

銀子さんが久しぶりに剣でも使って特訓するかーーとノリノリなテンションで裏庭へ出た時に止めておけば良かつたと後悔している。適当に樽に突っ込んでいたそこらへん（迷宮の宝箱）からかっぱらつてきた（持ち帰ってきた）剣を手に正面に構える銀子さんに相対するように僕は盾をしっかりと構え、片手剣を握る。

ぱっと見た感じおじりおじりして気配を漂わせる剣に僕は冷や汗を搔きながら銀子さんい問い合わせようと構えをすらした瞬間だった。

「隙あつこつ……」

咄嗟に首筋を護るように両手剣と盾で剣を鋏み込むように防御した瞬間、それは訪れた。

「あ、剣が折れた。」

「ちよ…っ…！」

剣が折れた瞬間、風が辺りに吹き荒れて僕たちを包み込んだ。

「ふむ、主が我の主かえ？」

「はい？」

声がしたので恐る恐る田を開けると田の前に黒髪の和服の美女が田の前に立っていた。

それはもう威風堂々と… 分かる人が分かる言い方をすると雰囲気は我様な金ぴか。

此方を見つめる金の瞳に自身の身長を超えてなお余りある黒髪。

やたら艶のある舌なめずりに思わず僕は言った。

「あ、すいません。人違います。」

「そ、そつか…？ってそんな訳無からうがあつ…！」

僕は穏便に済ませようとした。ただそれだけだつたんだ。別に面倒くもそつた雰囲気がしたからとかじやないよ？たぶん。

取り敢えず逃げようと身体を反転させるがどういう訳か田の前からその美女が離れない…比喩的表現ではなくて…。

「…あるえ？」

「つたぐ、此処には我と主しか居らんだらうが…大体主は…」

ぶんすかと擬音が付きそつた体勢で此方を怒りしかも説教を始める美女。

うわ、面倒くさいのに掘まつたと思い切り没面を作つて腕を組んで話が終わるのを待つてみる。

「…であるからして…。」

大学の教授でもここまで長い話をしないのでは？と思つぽどに時間が経ち、そろそろ眠くなつてきた頃…。

「…そもそも男とは…」

「あ、ごめん、もつ…無理。」

「ん？あ、主…話はまだ…」

僕の意識は落ちた。

「お~い、ゆーくん…早く起きないと首と胴体が泣き別れちゃうぞ~？」

そんな銀子さんの目覚ましで僕は目が覚めた。

目を開けると笑顔で剣を大上段に構えてる銀子さん。

咄嗟に横に転がった瞬間にそれは振り下ろされた。

…正直怖かったです。

訓練後、銀子さんに剣が折れたか聞いたがそんな事は無かつたし何時も通りキチンとあれから数合は持つて吹き飛ばされたとの事だつた。

はて？あれはなんだつたのか…？

気になつて樽の剣を一本覗き込んでみたらよく磨かれた刀身にあの美女の顔が映つて僕に向かつて何か言つていた。

『ツ・ギ・ハ・ノ・ガ・サ・ナ・イ』

これって呪いの剣じゃ…？

第1-1話 剣の妖精？（後書き）

何が書きたかったのかは自分でも分からなかつた。
余りの痛みに…明日耳鼻科行つて来ます。

第12話 僕の休日つて…（前書き）

仕事忙しいです。orz

今回は主人公がいまさら気付いた事。

第1-2話 僕の休日つづり

何時ものようにゆったりとした午後。

周りには何時もの常連が思い思いに過ごしておらず、コーヒーの芳醇な香りが室内を包み込む。

「ああ……平穏つて素晴らしい……。」

思わず呟いた僕はグラスを拭きながら店内を見渡す。

ラニーアスは今日は娘と嫁と家族で海に行くとか言つてたし……アーベは今日は迷宮に探索に行くとか言つてたなあ……。

銀子さんは悠久さんのパーティと一緒に迷宮に潜つたし……口リは知らん。

最近ちよくちよくと顔を出す半常連と化してきている人達も居る事は居るが……なんというか騒げないとかそういう理由であまり来る事は無い。

ああ、今日は全く持つて平穏な日常ではないかっ！

そう考えてふと思いつく。

あれ？僕って休日いつもなにしてるんだっけか？

そもそも僕に休日ってあったっけ？

此方に来てから大分経つけど…休日って貰った事無いよなあ。

……そこまで考えて僕は気付いた。

僕に休日と言つるのは…無い…だとっ…？

あまりに暇すぎて変な所まで行つてしまつたがその間にお客様から
来た注文はキチンと聞いている。

少し離れた場所にあるボックス席を陣取る同じ様な服を来た…まあ、
俗に言う学生みたいな感じの人達の注文の品を作つてゐるわけで…。

ちなみに学生みたいなと評したが、事実彼らは学生であり、この迷宮都市を研究する研究所の学生である。

その分野は多岐に渡るが最も多いのがモンスターを解剖したり、巣に潜り込んだりして生態を調べる事なのである。

中には冒険者科と書いて冒険者になる為のイロハを学ぶ者も居るのだ。

まあ、そんな彼らは割合この喫茶店を利用してくれる。

学生故に酒場等、冒険者が屯する所を利用すると周りの冒険者達から洗礼を受けることもあるのだ。悪い意味で。

その点喫茶店だと周りがお節介を焼きすぎることも無く、程好い距離で助言をしてくれたり、我関せずを通す人が殆どだからだ。

まあ、この喫茶店で騒げば怖い銀色の悪魔が出て来ることは有名なので騒ぐ馬鹿が居ないともいうが…。

そんな理由でよくここを利用する学生も多こと訳だ。

今日来ているグループは冒険者科の生徒が3人と研究科の生徒が2人。

男2、女3の割合でそれぞれ仲が良い。

よく僕にも話しかけてくれるし、僕からもドリンクをサービスした事もある。

しかし今日は何かそわそわしているように見える。

「あ、マスター。」

「はい？」

そんな5人の中でマスクット的なキャラだらう白銀の髪を二つに結い上げた見た目少女な子、名前は確か…そう、セレス・ラグドリアス。

彼女の身長は僕の胸ほどで、必然的に僕が見下ろす形になる。

琥珀色の瞳をしており、何より目を惹くのがその胸部装甲である。

同じような身長の口りとはまた違つてたわわに実つたその果実は幾人の男の視線を独占したのだろう。

時折彼女の友人の一人が恨みがましい視線をその胸に送つているのを見たことがある。

「あ、あのね…マスターって…。」

そんなセレス嬢がもじもじと上目遣いに頬を染めて此方を見上げてくる。

そんな表情にグッとする物があつたがそれを追い払つて彼女と視線を合わせる。

そうしないと自分を保てなくなりそうで怖かったからだ。

「なんだい？」

「えっとね…好きな人とか…いる?」

思わぬ言葉に僕は固まってしまう。

思い出すのは元の世界。

恋人は居なかつたよ…幼馴染みないな子はいたけどね…ただし女顔の男。

あいつが女だつたらと何度も罵倒したことか。

それぐらい可愛かった。

まあ、それは置いておいて…田の前のセレス嬢はじつと此方を見つめている。

その琥珀色の眼差しに僕は少し苦笑を浮かべて言った。

「残念ながら今のところは居ないね…。」

ちょっと…いやかなりの自嘲を含んだ笑みでセレス嬢から視線を逸らす。

ふん、どうせ僕は彼女居ない暦=年齢ですよーだ。

「そ、そつか…それだつたら…」

セレス嬢は何かを決意したように軽く僕に向かって指を突き付け

た。

「わ、私が…マスターをメロメロにしてみせますっ…！」

「ひ、ビシイッ！」擬音が付きそつた勢いで突き付けられた指に僕は啞然とするしかなかつた。

ちなみに離れたボックス席でこっちを見ていた4人は大爆笑。

ああ、そうか…これはきっと罰ゲームなんだろうな…。

なんかさつきからコソコソなにかしてたし、セレス嬢も恥ずかしいのか顔は真っ赤だし。

まあ、空気を読める男として僕はウザやかな笑みを浮かべて応える。

「ああ、楽しみにしてるよ。」

言つた途端背後の樽から物凄い黒いオーラが放たれた。

ちらりと視線を向けると先日出てきたあの剣である。

やはり呪いの剣だったか。

セレス嬢に視線を戻すと顔を真っ赤にさせたセレス嬢が「えつ？嘘つ！？ゆ、夢じゃないよね！？」と何故かテンパって居る。

取り敢えずこのカオスな空間をどうにかしたい僕なのだつた。

ちなみにこのカオス空間は学生たちが帰るまで続いた。

その後店仕舞いしてると田の前に先日見かけた黒髪の美女が現れて僕に掴み掛かり…

「！」の浮氣者…。」

と涙田で僕を前後にがつくんがつくん揺らすのであった。

…あ、何かお腹から込み上げて…。

「ちよつ、それ以上揺ると…吐…うおええええっ！…！」

「あーやあああつー！」

第1・2話 僕の休日つづけ…（後書き）

主人公はもげてしまえばいいとおもうよ。

第1-3話 ニートと無邪気な恋心（前書き）

仕事が忙しくて書く暇がありませんでした。
申し訳ない。rz

第1-3話 ニートと無邪気な恋心

夏も過ぎてようやく涼しくなり始めた季節の変わり田舎へは
やって来た。

「やあ、店主、久しぶりだね。」

にこやかに挨拶をしながら入店するそいつに僕は苦笑を浮かべて言
い返してやった。

「やあ、ニート…久しぶりと言つても昨日あつたばかりなんだけど
ね？」

おや、そうかい？なんて言いながらそいつはにこにこと笑いながら
カウンターに腰掛ける。

背中に生えた翼に物凄く鋭い鷹の目の様な眼差し、金糸の様に輝く
金髪を腰まで伸ばしたその美貌に均整の取れたボディーラインに数多
の男が彼女に言い寄つたらしい。

しかしそんな彼女には思わぬ欠点があつた。

「ところで店主、働くくともいい職場つてないかな？」

「黙れ、一いつ。」

そう、彼女ははたらきたくないで、『アレル』と公言するお馬鹿なので
あつた。

世の中には働きたくない人が居るところのアレルと内心憤慨しながら彼女に注文された品を作り、出す。

「うん、相変わらずユウの作る料理は絶品だ……どうだい？ 私を養う
といつ永久就職は？」

「断る。」

それは残念。とにかくこと笑いながらパスタをつづく彼女に僕は溜め息を吐いてフライパンを洗う事に専念する。

こつ見えて目の前の彼女、名前はニートと言い、冒険者である。

翼人で、空中からの弓での狙撃を得意としており、こんな性格だが結構上のランクの冒険者なのだ。

しかし生来の性格からか本人の本質かわからないが彼女がその役割を果たす事はあまりない。

一人で迷宮に行く時は仕方なしにと単身潜り込んで当面の生活費を稼いで戻つて来る事が多く、パーティを組んで行くと、その殆どを仲間に任せるという迷惑極まりない人なのである。

それでも腕は確かだからかそれともその美貌からか彼女を仲間にしたいという冒険者は結構多い。

そんな彼女は目の前で「ああ、働きたくないなあ。」と呟きながらパスタを突いている。

暫く放つて置くと彼女はブチブチと愚痴を呟くと何か思いついたのかポン、と手を叩くと此方に視線を向けて良い事思い付いたとばかりに僕の手をとる。

「どうだろ？ 私を養つとこつとも楽しそうな職が…」

「黙れ、ニート。」

握られた手を振り払う僕に変わらず「おやおや。」と笑顔を浮かべると何事も無かつたかのように再びパスタを突きだすのだった。

あの後何度も同じ様な遣り取りをして漸く彼女が帰った頃に新しい客がやって来た。

「やあ、店主、相変わらず客が無くて暇そうだね。」

何時ものように獰猛な ドラゴニアスの観点で見れば朗らかな 笑みでやつて来た彼の手にある物を見て僕は思わず其方に視線が行った。

それに気付いたのかラニアスは僕にそれを手渡すと面倒臭そうに中身を語りだすのだった。

「ははは…知り合いの商人から押し付けられてね…仕方なく受け取つたんだが…」

彼にしては珍しく困った表情で頭を搔く姿に僕は自ずとその包みが気になつてその包みを剥がそつと手を伸ばす。

「ああ、あまり迂闊に触れないほうがいいかもね…何しろ呪いの品らしいから。」

その言葉を聴いた瞬間、僕は慌てて手を引っ込めるとラニアスに視線を向ける。

その表情はどこか疲れていて…新婚ほやほやだった頃のラニアスを思い出させる。

あの時はラニアスが^{やつ}寝れていて奥さんが矢鱈と艶々していたのが印

象的だつた。

まあ、過去のこととは良い……取り敢えず田の前にあるゴレをどりつかるのかを考える事にする。

「残念ながら銀子さんは今は……」

「ああ、別に焦るものでもないからゆづくつ良いよ。」

呪いの品はこの間の件で十分だ。

じつこいつの呪いの品の『処理』は基本的に銀子さん任せである。

よくじつやつて呪いの品を力づくで解呪しているのを知つているのだろう。フーラーは苦笑を浮かべつつカウンターに腰掛ける。

「ああ、それと娘が君に会いたがつっていたよ。」

それは楽しそうに、しかしどこか寂しそうに話すフーラーに僕は苦笑で応える。

「……子供の成長は早いものでね……もう心は立派な淑女なんだろうね……どんどん男親から離れていくのや。」

哀愁漂う彼の姿にただただ苦笑を浮かべるしかなかつた。

「まあ、店主みたいな人なら僕も喜んで娘を嫁に行かせられるんだけどね。」

最後の言葉に僕は思わず手に持つた布巾を投げ付けてしまつた。

数日後、 ハラちゃんが遊びに来た。

なんでもお母さんから『今日はお母さん達は一番好きな人と過ごすから貴女も一番好きな人と過ごしなさい。』と言われて来たらしい。

カレンダーを見ると今日はラニアス夫妻の結婚記念日であった。

ニコニコと無邪気な笑顔を浮かべて僕を見上げるララちゃんと何時着たのかニヤニヤと笑みを浮かべるアーベに僕は溜め息を吐くしかなかつた。

第1-3話 ニートと無邪気な恋心（後書き）

ああ、働きたくないで『Jれる』。

でも働かないと生活が出来ないで『Jれる』。○「Z

第14話 オカマと猫娘、来襲。（前書き）

皆様、ご心配をお掛けして申し訳ありませんでした。
暫く事故の怪我の治療とPCの修理でデータが全て吹き飛んでおり
ました。

一応一段落着いたので更新します。

東北の地震、津波で亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。

第14話 オカマと猫娘、来襲。

カラーン、ヒドアベルが静かな店内に響き渡る。

グラスを拭いていた僕はドアに視線を向けて…すぐさま視線を逸らした。

「い…いらっしゃいませ…。」

何故目を逸らしたかつて?それは…

「あらあ、ゆうちゃん…お久しぶりねえん」

筋骨隆々な大男が俗に言つて文物のビキニアーマーで来店したからだ。

「ああ、今日は何にします…?」

クネクネとモデル歩きする大男に吐き気を堪えながら引き攣つた営業スマイルで注文を取る。

彼（？）はカウンター席を陣取ると「そうねえん。」と呟き…

「うふう、ゆ・う・ちゅ・ん・が・ほ・し・い」

「なあ、カマール…殴つていいかい？」

営業スマイルが般若に変わったのは言うまでも無かる。

「もう、冗談なのに…でも激しいゆうちゃんも魅力的だわっ」

あれから僕の拳をひよいひよいと事も無げに避けるカマールに僕は諦めて彼がいつも頼むホットドッグを作り、カウンターに置く。

それを口に入れながら僕を茶化すカマールに少し息の切れた僕は落ち着こうと水を一口含み…

「そりいえばアーベは来てるのかしら？」

ふとカマールが口にした人物に思わず水を吐き出しそうになつた。

「ゴホッ、ゲホッ！」

「あらあら、慌てすぎよ?」

思わず呟く僕にカマールは優しく背中を擦ってくれる。

…基本的に良い奴で、個人的には好感が持てる奴なのである。

「早く愛しの彼に会いたいわあ…」

これがなければなのが。

そう、コイツはバイセクシャルなのである。

因みにロックオンされたのはアーベである。

本人に聞いてみた所…何やら運命的なモノを感じた。とか。

その後の僕を舐める様な目で見て来なかつたら心から安心出来たけどねっ!!

結局5時間程してからカマールは帰つていった。

時たまやつてくる冒険者に向かつて「ウホッ、イイお・と・」とか言つた時は思わずお盆を投げてしまった。

ちなみに彼が食つた冒険者は暫く冒険者稼業が出来ないほどの男性不振に陥るらしい。

何故とは聞かない…恐らく牡丹の花が落ちる光景と悲鳴を連想すれば判ると思う。

まあ、取り敢えず悪魔は去つた。

僕は気を取り直してグラスを拭く作業に戻りつつとして…

「あややややあ…！」

ドンガラガッシュシャンと大きな物音と共に店の椅子や机を巻き込み来店してきた少女に溜め息を吐いた。

「はいーじさにちわーーーんばんわーー！」

異様に高いテンションに向日葵の様に爽やかな笑顔…少し外に跳ねた肩ほどの赤髪に左頬にある一文字の切り傷。

少し釣り目なその青目を細めて本人曰くチャームポイントな八重歯を見せながら元気良く片腕を伸ばして立ち上がる獣人の少女は何事

も無かつた様にカウンター席に着くとバンバンと机を叩いて僕を見上げる。

「マスター！カミューをくれー！」

「酒なら酒場に行け。」

少女の言葉に僕はそっけなく返す。どうかむ……と唸りだす少女。

すると次は何を思い付いたか？

なにマスター！ 三川ヶ谷！！！」

...
」

一
わあーい！！

返つて来るであろう言葉が返つて来たので彼女用に少し温めのミルクを差し出す。

それをゴクゴクと一気に飲み干した彼女はふはあー、と少女らしからぬ動作でカツプを机に置くと尻尾をフリフリ…

「マスター！もう一杯！！」

「はいはい!」

次を催促するのだつた。

目の前で上機嫌に焼き魚を突いている少女は最近この店にやつて来たのである。

初めは猫被っていたのかとても大人しそうな子だったのに仮面が剥がれたと思ったらこんな感じで来るようになつた。

そんな事をぼんやり考えながらグラスを拭いていると…

「つこ～っす。」

何時もの様にやる氣の欠片も無い声でアーベがやつてきた。

「マスター、何時もの～。」

アーベは何時も通りカウンター席に腰掛けると何時もの様に注文をする。

「はいはい。」

こっちも慣れたもので何時もアーベが注文するエールにつまみをいそいそと用意する。

まあ、何時もツケで払うわけなのだが…

ふとアーベの隣に座つてゐる少女に目線を送る。

彼女はアーベが来た途端にしおらしくなり…チラチラとアーベをちら見してゐるではないか。

アーベはそんな彼女に気付かず…

「今日はホントに疲れたよ…パーティーの奴ら、新人に何期待してんだか知らないけどよお…。」

と愚痴を零しながらチビチビヒールを飲んでいる。

僕は黙つてグラスを拭きながら適当にアーベの相手をしていくと、アーベは言いたい事は言い切つたのか深い溜め息を吐いて…

「ああ、じめんねマスター…何時も愚痴つちやつて…で話は変わること…」

「ああ、はいはい…次はちゃんと払つてね。」

「さつすがマスター！分かつてるー」

鼻歌を歌わん勢いでそのまま退店するアーベ、慣れた僕もつい適当に流したがこれは何時も通りソケでお願いと言つ事だ。

ふとアーベが去つた後少女を見ると…矢鱈と興奮した表情でアーベが口にしていた食器を舐めていた。

「はあ…はあ…アーベ様あ…」

もつそれは発情期真盛りの猫の如く。

頬を紅潮させてうつとりとした表情でアーベが座っていた座席にスリスリと頬ずりをする始末。

僕は取り敢えず彼女の唾液でベトベトな食器を水を張った盤に付けて万能消毒液を放り込むのだった。

第15話 奴隸市場での出来事（前書き）

奴隸市場といつより…ハ 一〇一ク?

第15話 奴隸市場での出来事

さて、僕が何故こんなくだらない事に思考を割いているかと言えば……
「ぶうるうあああああああああああつーーー！」

「ぎゃあああああつーーー！」

僕の朝は早い。

と、よく人には言われる。

自分では自覚はしていないがどうやら僕は早起きと周りから思われているらしい。

…特に意味は無いけどね。

「げふほおつー」

「たわいりばつー」

「あべしつー」

田の前でなんか処刑用 BGM が流れそうな無双が行われているからだ。具体的に言つと世紀末に起きる史上最悪な義兄弟喧嘩。

事の始まりは今日の朝である。

何時も通りに起きて店先を掃除していると最近冒険者達の間で噂されてる青年が立っていたのだ。

名前はシユリオ… 相当なイケメンだった。 もげろ。

彼は無言で僕をジロジロと眺めると…

「ふん… 居ないよっかはマシか… おい、付いて来いー」

そう言つて有無を言わざる僕の襟首を掴んで何処かへと引き摺つていった。

道中色々問答したが奴は聞く耳持たずで僕を引き摺つていった。

確かに噂では実力があつて礼儀正しいが一度思い込むと話を聞かない猪坊主。 と揶揄されていたが… これは聞かぬ過ぎである。

そろそろ諦めの境地に立とうとしていた僕は急に手を離されて地面に受身を取る間もなく落とされたのだ。

「あいてて……」

「……だ…行くぞ…」

僕の返答を聞かずにシユリオは田の前の施設に飛び込んで行つたのだ。

服に付いた埃を払いながらその施設を見上げて僕は絶句する。

「……は？」

そこは迷宮都市『公認』の奴隸市場だったのだ。

迷宮都市では様々な理由でパーティを組めない冒険者が迷宮に潜る時に奴隸を雇う事がある。

勿論奴隸と言つても『公認』と銘打つてゐるだけあってそこまで酷い扱いをされている奴隸は居なく……言つてしまえば職にあぶれた者、元冒険者で怪我を理由に単独での活動が難しい者等が集まるのだ。中には村の口減らしや放浪者……軽犯罪者等も居るには居るが元々住む場所が無かつた者達の最終避難場所として迷宮都市が『公認』している市場なのである。

『公認』と銘打つておけば不当な扱いを受ける事も無く……都市自体が諸経費を持つ為に飢える事もない。

まあ、重犯罪者や訳ありな奴隸は裏で売買されていたりもするのだけれど…。

ちなみに僕ら一般市民でも奴隸は買えるのである。

専ら従業員が欲しい店や子供が居ない夫婦…また、小間使いが欲しい富豪等が大半であるが。

まあ、言つてしまえば奴隸市場とは名ばかりの仕事紹介所みたいなものである。

ぶつけやけぬハロー〇ーク

しかし「れはまざ」の状況である。

奴隸市場とはいえ都市『公認』の市場を襲つたのだ。

どんな事情があるのか知らないが取り敢えず彼を止めないと厄介な事になると僕は彼を追い駆ける様に中に入り…

冒頭に戻る。

「…まあ。」

吹き飛ばされた護衛であらう強面のお兄さん達は痙攣しながら地面とキスをしているではないか。

思わず溜め息を吐いた僕は悪くない。

ちなみに無双をしているシユリオは何事か叫びながら奴隸達が『匿われていろ』部屋に突き進んでいる。

近寄ってきた屈強な男を吹き飛ばすシユリオに部屋の中で息を潜める奴隸達。

…頭が痛くなつてきた。

思わず出たつた溜め息を…我慢せずに吐いて僕はシユリオに近付く。

「ん？おお…遅かったな…」ここあの方娘が捕らえられているんだが

…。」

彼の中でどんなストーリーがあつたのかは判らないが彼が立つていて話を聞いて纏めてみるとたまたま奴隸馬車に乗っていた娘に一目惚れして彼女を助ける為に乗り込んだ、と。

ちなみにこの短文を纏める為に長い長い自己陶酔話があつた。時間にして凡そ1時間近く。

「…だが、俺が来たからにはもう大丈夫だ…待つていてくれ…俺の姫よ！」

「凄い盛り上がってる所悪いけど…キモイ…。」

部屋の扉が開いて出て来た少女に言われた言葉にシユーリオが固まる。

まあ、そりゃ扉の前で話してねえ…。

ぱっちら内容も聞こえてたみたいでドアの隙間から見えた奥で顔を真つ赤に恥ずかしそうに顔を俯ける少女がいた。

腰まで伸びた薄い蒼髪にメリハリの付いたボディライン…片目を覆う眼帯に着流しを着た扉を開けた少女に奥で顔を真つ赤に染めて俯く輝くような金髪を肩で切り揃えた慎ましい体型の犬耳少女。

共に美少女であるが僕らを見る目は方や不審者を見る目…方や恥ずかしいのか目すら合わせてくれない。

ましてや眼帯少女は腰に差した護身用であらつ剣に手を掛けている。

そして更に最悪な事に…

「全員動くなつー。」

背後から警備隊がやつてきたのである。

シユリオは不敵な笑みを浮かべて手に持った剣を頭上に掲げて名乗りを上げる。

「我が名はシユリオーこの世界ただ一人の…英雄だ！－」

彼の眼前には完全武装の警備隊。

青を基調とした全身鎧に身体をすっぽり覆う楯…手には相手を無効化する為のメイスを構えた元の世界で言つ警官みたいな人達が彼を取り囲んでいる。

置いてけぼりな僕と少女達はただその成り行きを見守るしかなかつた。

「ふうんっ！」

ブオントシュリオが剣を振るえば面白いよつて警備隊が一人、吹き飛ぶ。

僕と少女達は部屋に避難して先程の衝撃で壊れたドアの隙間から外を観戦していた。

おろおろとどうすればいいのかわからないと言つた犬耳少女に腰を落ち着けて外の様子を見守る眼帯少女。

そして……どうしてこうなつた。と頭を抱える僕。

「ふはははっ！そんな物か！？」

矢鱈とハイテンションなシユリオに警備隊の人達は苦戦している。

何故かつて？それは…

「…ふむ、ある意味我らは人質みたいなものか…」

「ふえつー？」

「…まあ、立ち位置的にねえ…。」

部屋の前でシユリオが暴れている。

字面にすると何て事無いかもしないが… 警備隊の人達にとつてこれは致命的である。

判りやすく言えば銀行強盗が背後に人質を連れて立っているような物だ。

下手をすれば戦闘の余波が此方に飛んでくる。

それがあるから警備隊の人達も迂闊に攻撃できないのだ。

それに…

「さつさと其処を退けいつ！ 我が霸道を阻む者達よーー！」

自己陶酔真っ只中のジャンキー薬物中毒者相手に対話は無理である。

故に警備隊は手を拱いているのである。

これは長時間の均衡かと思われた時、それはやつてきた。

悠然と歩くその姿に今日は腰に提げたショートソード、流れる腰まで届くほどの黒髪は忘れもしない、銀子さんの仲間の一人、悠人さんである。

彼は警備隊と何言か話すと一つ頷いてシユリオの前に立ち… 静かに半身に構える。

右手を前に左手を腰に…腰は落として何時でも飛び出せる体勢に。

「ふん、とうとう親玉が出てきたか！」

「……。」

シユリオの言葉に答えず、悠人さんはただ目で問う。

やるのか？やらないのか？

それを挑発と取ったかシユリオは青筋を浮かべながら剣を正眼に構える。

次の瞬間に一人の距離が縮まった。

彼、シユリオは確かに強かつた。

戦場に出れば一騎当十まではいかなくとも一騎当五まで行くほどの
兵である。

だが…

「ぐ…なぜ俺の邪魔をする…！」

「……。」

ジャイアントオーケーをその拳一つで黙らせられるバグ相手にはその強さも震んでしまう。

シユリオが振るつた剣を一本の指で受け止めたり…腰の入った拳をその身に受けてもよろける事無く…寧ろ相手の拳から嫌な音がしだぐらいだ。 受け止めたり。

ほぼ無詠唱で放たれた魔法の矢を拳で打ち碎くとか。

最早なんでもありじゃね？つていう位に非常識な存在である黒髪の青年：悠人を相手にシユリオは苦々しい面持ちである。

悠人の実力を知っていると言つてもほんの一歩のみではあるが自分としては彼が出張つてきた瞬間に後ろの少女達と仲良く傍観する事にしたのだった。

数分足らずの攻防は一瞬で決着が着いた。

一瞬の隙を突いて近寄つた悠人の拳が彼の胴体を射抜いたのだ。

「ぐつ……つは……。」

「……。」

崩れ落ちるシユリオにそれを見下ろす悠久さん。

周りの警備隊は慣れてるのかそのまま「確保ーーっ！」とか言つて警棒代わりのメイスを叩き込んでいる。…主に顔面に。

中には「食らえい！正義の鉄槌をあつ！」「とか「イケメンは死ね！氏ねじやなくて死ね！」とか「俺だつて…きょぬーのお姉ちゃんに踏まれたいわあ！」等訳の分からぬ言葉を叫びながらシユリオをボコボコにしている。

取り敢えず最後の奴は周りの部屋の女性陣から冷ややかな眼差しを贈られてビクンビクンと痙攣していた。

僕は思わず溜め息を吐いて…くい、と袖を引かれる感触に振り返る。袖を見下ろすと先程の金髪少女が不安そうな眼差しで此方を見上げている。

少し潤んだ瞳に思わず保護欲が駆り立てられる。

思わず少女の髪を撫でてしまい…少女は少し恥ずかしそうに…それでも嬉しそうに頬を赤らめて大人しく撫でられていた。

因みにその少女の隣の眼帯少女は悠久さんに強烈な熱視線を送つていた。

それは猛禽類の様な目で…ちょっと女の子が怖くなるような目であった。

後日、迷宮都市の市長から今回の件についての話を聞きたいと悠人さん宛に手紙が届いた。

なんでも公認市場始まって以来の惨事である今回の事件。

不安に思う奴隸達も多く…早く仕事を紹介してくれと奴隸達から苦情（？）みたいなのが多数寄せられたらしく、巻き込まれたとはいへ、止め切れなかつた僕にも責任があるとして被害に遭つた少女二人を僕が買い取るという形になつたのだそうだ。

しかし奴隸とはいえその値段はピンキリである。

しかも愛玩用として売られる予定の奴隸は質と値段が高く、僕個人の財産では一人を買うのがやつとの事で悠人さんとその少女達に『お詫』をした所…。

「…ふむ、では俺が一人…引き取るわ。」

悠人の鶴の一聲で眼帯少女が悠人に買われたい！と激しく

血口半張したのもあり、僕が犬耳少女を買い取る事と相成ったのである。

お値段は一般市民の給料5年分とだけ言つておいで。

日本円換算で3500万程である。

そつとして今日から新しい従業員を加えて……喫茶『蒼翠』開店します。

「あ、ルナちゃんー足元気を付けて……」

「ふえ……は、はわわつー?」

ガシャン!と犬耳少女こと、ルナちゃんが自分の足を引っ掛け盛
大に転んだ。

「あひやあ……」

「「「めんなさい……」」

「大丈夫かい?ルナちゃん……あべしつー」

デザートのバナナアイスクリープを運んでいる途中の出来事である。

全身に纏わり付くちよつとべた付く白いアイスに座り込んだ姿勢…
羞恥からか頬を赤く染める少女に垂れる犬耳。ちなみに服装は銀子
さんの趣味でメイド服である。

周りの男連中は何名かは凝視し、何名かは身体を前屈みに、意外にもアーベは手に持ったお手拭でルナちゃんの顔を拭っている。

意外とフュニーストなアーベであるが…次の瞬間殴り飛ばされる。
周りの男連中」。

「てめー！」アーベの分際で…俺達の天使に手を出すとは…」

「ちよ…まつ…」

「問答無用じゃ われえあつ…」

「ぎやあああああつ…？」

複数の男に囲まれるアーベ、それを肴に騒ぐ冒険者。そして静かに怒りに震える…僕。

「あ…あの…ますたー？」

若干怯え気味なルナちゃんを立たせて店の奥で着替えに向かわせる
と僕は手に砥きに砥いだナイフを構える。

「あ、懺悔の時間だ。

「手前らー…いい加減にしろやあつ…！」

「 「 「マスターが切れたあつ！？」」

騒いでた男共を追い出してスッキリした僕はガクガクと震える着替えてきたルナちゃんの頭を撫でながら笑顔で問いかける。

「 あ、もう店仕舞いにしようか？」

「ふえつー？ひや、ひやーいー。」

完全に怯えきった様子のルナちゃんを落ち着かせるように頭を撫でる。

…撫でられた本人は何時その怒りが失敗ばかりな自分に向くか気が気でないであろうが…。

…撫でられるのが好きなのだろうか、徐々に震えは收まり、もつともつと強請る様に優の手に頭を擦り付ける。

暫くそうじて帰ってきた銀子さんが騒いだのはまた別のお話。

第15話 奴隸市場での出来事（後書き）

取り敢えずストックを放出w

第16話 影が薄い。（前書き）

果たして覚えている人はいるのだろうか？

第16話 影が…薄い。

ルナちゃんが入つてから数日、あれから田立つたミスは…ありまくつたけどそれの後処理も業務の一部に入る程度に慣れた頃。

ピロピロとネームを動かしながら女性がカウンター席に着席するのだった。

「やつほ~。」

ぽわぽわとした空気を醸し出すその人物は皆覚えているだろうか?

少し頭の弱い冒険者… キュリエルさんである。

猫の獣人である彼女はその独特な空気も相俟つてとても冒険者には見られない。

本人に言つと機嫌を悪くしてしまうがその怒つた表情も怒つているように見えないので迫力も何もあつたものじゃない。

しかしその見た目に反して彼女は前衛職を務めるJランクの冒険者である。

武器は腰に提げたレイピアみたいな細剣を操るのだ。

一度剣を振るつている所を見せてもらつたが何故Jランク程度で収まっているのか不思議な腕前だった。

まあ、理由は…

「ナニと言えばまたランク試験落ちちゃったよ～。」

「あはは…やつぱり…筆記ですか?」

「うう…どうせ私はおばかですよ～。」

そり、試験である。

Bランク以上の試験から筆記科目が増えてくるのだ。

Bランク程の依頼となると依頼主が地方の領主だったり、気難しい人だったりとある程度の礼儀、マナーがなってないと依頼主とのいざこざの原因となるのである。

その為に常識問題やマナー、礼儀作法の試験が出来たというわけだ。

まあ、そういう教養は無くて困るものでは無いし、更に上のランクの冒険者になると王族やギルドマスター等のお偉方を相手にする事もあるので更なる教養を要求される事もあるのだ。

「うう…礼儀作法は大丈夫だけど…常識問題があ…」

カウンターで頑垂れるキヨリエルさんに苦笑しながら彼女の前にアイスティーザーを置く。

それをストローでちゅー、と吸い上げる様は色氣も何もあった物じやないけど…マイペースな彼女らしさが滲み出ていた。

『主！主！我を忘れるでない！！』

閉店後、久しぶりに倉庫整理をしていると、樽に放り込んでいた刀がガタガタいっていた。

：取り敢えず近所迷惑になるので樽に蓋をして上に重石を載せておいた。

『お、おい！主！出さぬかっ！！』

何か聞こえたけど僕は敢えてそれをスルーし、何事も無かつたかのように作業を再開するのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796/>

異世界喫茶物語

2011年10月8日09時01分発行